重修真書太閤記

二編

六

459
16

堀尾茂助心金鉄之如シ岩倉山落城之比
火忠右門

消印
福永

へ13特
門書
號 459
卷 16

重修真書太閤記二編卷之十六

堀尾茂助開道案内者の事
并秀吉主従敵城へ忍入事

木下主従七騎敵城乃後へ廻らんと月の光城知屋ぬく切所艱難乃深山路傳ひ行路次ゆく堀尾茂助ゐ猪と仕留さふをみく且驚き且感ゐ立寄見まゐ茂助と猪の尾、城握り詰くゆくのはゆく息絶しゐ似くう蜂須賀稲田はゐれと見く不便乃ことゐ思ひ茂助ゐ握つし手、城引放ち助けんとふしまゐる城木下わ留めくいよ様かくの如く凝固まうし指城無理ゐ引放せば指折く後く難義とゐ

河政會印

るべし握り尾を牡のまゝ打切暫時息休め腕を温めゐ
ゐ心神静かにして初の所うゝ指延さるゝ所にてこれと云へ
稲田刀にて抜く猪の尾にて切らう木下呑残きし瓢簞の酒
を茂助に口すゝ濺ぎ件の腕を帛にて巻き種々と介抱
ふし居ちゝ漸息出るる時汝は何者なるぞと夜中只一人深
山に入くゝる危き働にて汝が休相かやうの
ことも業とせるものとも見へ血氣の勇ふるやうと
思慮なき挙動と云へし諫めらるゝ茂助莞爾と打
笑ひ汝不審尤なれ共我等ども御邊達何
國の人なれ何の為に此山中へ分入るやと此山澗
を我等乃住居なく斯業を世に経ふる故昨日も同じ

れを血氣の勇なるに昨日も同じ
危に経くて乃日くを渉る身なれ生れ
猟師ふるあるに聊心中に祈念をしなる腕に
やし身を習さんとく三年尓降此山谷に捜息とし
奇代の猛獣を得くれに以て運を試くとはひし心
中乃所願今者満足なる験と見えて獣をば仕留しと
されもいまゝ機縁の熟せざる故に一旦息絶しるべし
あるべしは有様やと談話中に腕の榮衛緩しとみえ
乃ゞと猪の尾を取落茂助ころびし帛に解く
指を動し見るに掌のあけ見るのくふて聊過ぬ
さべきの血を拭ひく介抱の厚情に喜びて側に畏る

乃時木下斯の如き深山の中ふして無意壮士ふ面會せしこと
必定宿世の縁と云べし然バ一方ならず思ひ悦し思ひけれバ
汝の心中ふ祈念せらるゝ処を定て良主ふ仕へて身を立んと
乃ことならん我よくやくその意を覚て知らり包て隠すこと
なかれ我も尾州清洲の侍ふて木下とつくものゝ汝ハ往昔
岩倉ふて雅弱者ふ似合ず首尾を合せし者ふいつれば汝や
我等今夜ハ乃処へ来りしハ此城の搦手へ廻らんが為ぞわ
汝が身を立んと今宵ぞわ手初なさせ麁しを乞しく
取ほしく得さ汝べしこれより先の案内者を汝なすべく
やく路を指て進めよと云
流布本ふ木下織田殿の賢明を説且齋藤の闇弱を論

ざり事はまゝふ鄙俗なれバ一本によりて是を削る
浅助熟聞くのち織田殿乃御内ふ木下どのごとく洲の股ふ砦
を一夜の中ふり築きたまひし人ありを承なりしは身ふて
在りや其元ハ尾州の生ふて芳かむかしを申出るは織田殿
ふも定めて知食ことをいはんさるゞ弥織田殿ふ仕へ奉ら
ん由緒をありと申ぞ度なまどとも聊憚所ありて織田家ふ
まみえかしうきことなれば夫といふふと申にそれがし
父忠右衛門浪々の身なりしを岩倉の伊勢守殿より出され
不便をと加へるゝひしこと浅からざれはひとさ然るふ伊勢守殿武
藏守殿ふ一味なし織田殿を謀りまんらせしふ其こと露
顯して武藏守殿ハ織田殿のためふ討れしかども伊

勢守殿ハ更ニ織田殿ヲ従ひ奉り弥織田殿と弓矢ぜとく岩倉乃城ニ籠りうのひるゝ計らゞ熱ぜ患ひ給ひ世をさるやくと思ひ給ひ然ども末期の遺言を守りて家老の面〻心ぜ一致ゆゑ籠城セしふこれも又織田殿乃為ニ責落さるゝ津田七郎左衛門を始め名ある侍多く討死して後城ぜ開き諸士退散をし時我等父子も人並ニ落人となりこの國の知人を頼ゝく朝夕を過しゝ勢州の恩ぜ思へば二君ニ仕ふる心ゝく草深き賤乃藁屋ゆて父なるものの果ハ〻今を獨身の某いかを従ふ共心のまゝと云ゝ〻父ゝ故主乃敵なる織田殿ニ仕へんとゝ義ニ背とやゝ〻べき然ども今宵介抱ニ預り恩ニ報ひ奉ら

是より當城乃後の方ぜ路案内仕るべしとゝ申ふ木下も堀尾ゝ義心ぜ感じふゝび奉公のゝと勧めぞこそ案内ハ偏ニ汝を頼ゝとゝ乃邊まゝくゝ一段嶮しくいへども心易くおやしわを朝暮通ひ馴ゝる我等ゝ郷導仕いへば木の根岩角精密しくゝも聞食語りゝゝ先登仕らんと立あらまゝば七人共人〻そのもしきゝ仕りぜのひ〻時刻をぞニ移ゝぬ急げやくと云まゝニ茂助ゝ跡ゝ續いゝく磐ぜゝる誠ニ雙なき難所なれども年比日比試ゝ通ゝ案内者あまゝば更ニ共ぜ共の岩を門ゝいかしこの藤ニ取付ゝ二時ぞゝ乃間ニ絶頂ニのゝぼりまゝゝ城中ぜ

礼を實を手を取様ぶを見えてうける木下能く伺ひる
て後に要害城のこゝろぶをしく守る兵士をゝさが如くせ
斯ていよく心安しと八人乃衆を城乃構ひさして押よ
せると此道筋に難所を少く殊さら下り坂ゆく行程を
延けるに勇める心を知べゆくやがて城乃外まぐ着るゆ
まう爰ゆく少し休息るし城中の様ひ伺ふりそがるゝ
柵ひ結ゆはしその中ゆ小屋をかけ火ひ燃さして雑兵少く
居眠りねるゝ是を兵糧を炊くるべし木下青山小助ひ
呼ゝく爰に邊乃働ひ用ゆひ処ゆう忍入く斯くるゆ
といふ小助承ゝるゆ何處らゆ忍び入べきと見廻るゆ柵ゆるゆそぐ早乃礼

どもその外ゆ口七八尺乃溝ありて水に浅く底ゆいさゝ
かこえるぐゝ切岸高くて足ぐゝ乃ひ如何こせやと案じ
けるを茂助見ゝく橋ひ渡して進ぜ参しと云まゝに傍ゆ植ひ
杉の木乃貳丈ばかりを有ゝとゆゆるを蜂須賀梶田堀尾立よ
ゝく押倒しそのゆ溝え打ゝくをゆ忽一条乃丸木橋をゝ
しゝ小助得ゝと橋を傳ひ柵を越く城中ゆ入爰らしこ
伺ゝく後彼兵糧焚所へゝくをゆ夜を既乃丑乃ばかり
雑兵十人ばかり熟睡して更ゆ正体なけをば小助やがく抜乃
小屋へ立入見ゆはをゆ櫃の内乃飯の残をるのゆる我物
顔ゆ抱取ゝく持出し柵乃本へ来ゝく木下を招ゝをて木
下主従ひ共を懸をゝを柵の中へ乗入小助ゆ奪ひ飯

櫃城打うまくそぶる色ちく各喫おそうその後木下人く
ふもうひゆ様面くしく見のく道三ゞ此城を築し時ハ爰処
少も守護を備えく と見え番所後所乃礎らしさもの見
ゆ要害よく用心よしをし 道三の捉乃如く爰ゆも番兵往
五六百人も守り居くくふい我く何とく爰まぐく入る城
得べきやこれと云も齋藤乃運の末みろりけるゑしとて去
べき老臣家人をあれをれのしゆ者のろくかくはぐく油断ゑの
乃浅ましさよ此様子あらゞ大手へ廻るとを心安うるべしぐく
其用意ゑとゑせよやとくゆひく拵をゑし齋藤ゞ勢の袖ゑし
合印城取出くハ人ひとしくゑ礼を付當家の雑兵ゞ兵糧えこ
ぶ体城まねび小助ゆ兵糧小屋の飯櫃のあるかぐさう奪取をそ

のち小屋乃外の芝薪積ゆ中へ火薬城そぐぎかけやゞ
く燃出べき様く 丈度くさぐく十餘ケ所ゆ仕うけ置く四
人を櫃をとうゞげ四人を明手ゆく大手をゑして下りくり
稲葉山落城一書ゆ永禄七年八月二日の事と伝然をゞくも
織田家譜ゆ永禄七年八月のくして日次を云ゞて又岐阜人
の説く 八月十四日ハ齋藤落城乃日廿二日ハ中納言秀信卿敗
亡乃日ゆれゞ諸寺ゆ於く六魂得脱の法會を修をとき
く今えまくゞ然るゆや

織田勢稲葉山二の丸を乗取事

并 木下藤吉郎龍興開城を勸むる事

運乃乗ゞて事城行べ其勢破竹の如ゆく奇代乃大功城立

へしとかや織田殿開運乃時節到来し濃州過半味方ゑ加
たりしかは稲葉山の一城いとゑ強くとを何ゑどれるの者
ゑき一時責ゑ責落さんと尾州勢十隊ゑ組分て押寄稲麻
竹葦の間をゑゑどとも城強して三日まで落し得ざりし就
木下思慮を廻らし間道を経て堀尾ゑ如き勇士ゑ出會し
その郷導ゑ従て嶮難乃道筋神速ゑ經歴しる故郷く
城中ゑ紛れ入心のまゝゑ謀の整ひしとい却て末代不思
議乃功烈を立のゑ木下の所為なるまじやと知まくり中
ゑも茂助い城乃外まで案内せんとの約束なりしゑ木下ゑ
いざなひて城中へ入共て大手ゑ向ふとて介抱就受し
報恩ゑ城外まで乃案内をなし内るゑ兵糧を飽

まで喫る恩ゑ報ひまくりとゑ今まで従ひまるゑこと
れも菩薩ゑ仕ふる身乃ゑどとるゑと戯まし就木下聞て
一粒万倍とゑ等閑乃働ゑ叶ひ粉骨砕身せざるゑ
はしきとゑと打笑ひ行ゑどゑ所くゑの役所くゑと難なく
通り二丸の大手ゑいるゑ諸将の持口さゑゑ用心をゑり
まで北軍を止めて徒然なるまゝ前後を知ざるまゝ臥
く油断の容子就見て中し大手乃門就向ふて鎖を上し
鎖なくて開ゑし左の方をとゑれを外堀の水を堰いて水
門ありて乃門を簀戸就引掛るまゝゑ鍵を鑰もゑ
なけるゑゑなくて責いりゑ心易しとわりひ定め
先味方へ案内なるゑべしとて例の瓢箪就竹の先ゑ結付

て水門の上なる塀より高くさし上ゝりかくゝの七木下七人の
ものゝ今はて勇氣を用ふる時なるぞ件の簀戸を引あけよ
と下知なすと蜂須賀父子稲田梶田堀尾水中に飛入りて簀
戸を押破らんと両手を貫みけ金剛力の腕を入るいやと引
上ゝるゝ共難なく水門を引破りゝゝ
流布木の蜂須賀父子夜盗の用ふる玄能小て簀戸の左右
の方立をさゝ放さんとなれを五人の輩両手を貫みけ
てとゝりあらんとすれども稲葉山水門の簀戸を突上作りの
く内よりゝ引上るを便よしとす故の是をとゝ涙
追手の持口の兵士そゝめくゝ八人のものを味方の雑兵と
おもひ居るゝのゝ簀戸を引上るゝゝゝゝゝ小心を

付涙有けるゝ何故ゝ水門をゝ引上しぞ誰々の差圖なるや謀
反人出來く裏切なるぞやあの曲者を捕て穿議せよとゝむし
めく折節山上ゝゝ黒烟天を焦して覆ひゝゝれが本丸以の外さ
周章しけるゝゝゝ二の丸の諸将ゝゝ取りのを取あくぜ山
上ゝゝして馳登るゝ於い木下ゝ家前兵粮小屋の柴新ゝ仕
ゝけ置ゝる火藥ゝ燃付ゝる時ゝ深山の曉嵐ゝけしく吹
てゝゝゝく間ゝ燒競く作りゝゝべ一番所役所へ火ゝゝ
餘焔夥敷ゝちゝゝ本丸の舘へ火の粉ゝちゝる防ぎと
めんとゝるゝ火勢愈さうなるゝゝゝ如何ゝせよゝとあゝ
ゝける所ゝ女性稚くものどもの泣さけぶ声老人足弱迷ひ
そゝ逃おのきゝゝゝゝゝゝ逃れ出ゝゝゝゝゝゝゝ以の外ゝ騒

動きるゝどゝ水門破りし曲者とびおのゝと餘所ゟ見居て立さゝぐ処へ大手乃城の外ゟい木下の手勢八百余騎小市郎秀長ゟ真先ゟ進ゝゝるゝ合圖の鏑箭を見るゝゝもそゝゝ搦手乃人ゞゝゟ力ゟ合せゝやといふまゝゟい植を叩ひく関ゟ作さびそ乃声山谷ゟ響てゝびゝゝ所へ蜂須賀小六郎水門の簀戸もとくゝゟ出く味方を招ゟよゝめ我劣ゝと堀もとゝく乱さ入大手乃門を打破る城兵多ゝゝ火の手ゟ氣ゟ奪ゝれゝゟれを遮り止ゟとゝるゝもの多く考ゞ茫然ゝる処へ寄手ゟ追々ゟ込入切て廻り考るゟどゝ落るゝもゝく本丸もさして引退く大澤次郎左衛門ゟれを見ゝく小市郎ゝつゝゝゝゝ共と馬乃上り立上りて下知を

なせば相従ゝの共曳々声を出して責入ゟ見ゝく荒田池田坂井森前田次弟ゝゝゟ白根野兄弟本丸乃ゟゟありて防戦ゝるゝ斯大勢の入ゝゝゝゝゝ白根野兄弟本丸乃ゟゟありて防戦ゝるゝ斯大勢の乱入ゝを見ゝく爰ゟく防戦叶ふまじゝやく本丸ゟ入て堅固ゟ護るべゝと諸士を先ゞゝて引立さび長井牧村もゟゟゟく持口ゟ捨ゝく本丸へ引て入寄手ゟ付入ゟせゞゝやと進ゝ行城木下ゝく制して追ゝめ防退るのゝゝゝに退せよと下知ゝけさび二丸ゟゟゝし齋藤方の諸士ゟ云ゟ及ゞゟ雑兵以下一人を残ら防本丸へ引取ゝゝゝ尾州方ゟく二丸を取ゝゝめ後所ゝく城来取ゝく味方の休息所と防関を作ゝく威を示ゝ山上の火ゟ防ぎゝく備を立ゝゝ本丸ゟゝい右兵衛大夫龍興ゟゝゝゝ

乃火の手ふ驚き怖ぢ氣も魂も身ふそなはらぬまでに成て
見へくるわるものが日根野兄弟長井牧村無事ふ本丸ふ入來る成見
く死しぬるもの〜蘇てくるる心地して行きて安堵ぢ川ぢども
搦手ふ火勢いよ〜盛ふして鎮まらんとも計られぬ成
手ぢ二丸ぢく込入て然も大勢ふて厳重ぢ備えてあれば乃上
兵粮小屋焼失せ〜ふてわさし當り朝乃粥も焚べき手當も形
く難澁つぶ〜ぢ成されぬ寄手間近く満くるに成て本
丸の役所をそれ〜ふ割付てあるぢ成守らせるのみ成木下こ
乃時息をも円ぢず攻〜ぶ忽ふ落城ぢ成べきわるる成兼て竹
中と約束を〜処ふ爰ぢとく急ぎ本陣ふ参向し織田殿ぢ
御前ふ出けるふこの日比責あぐぢし城を今暁一時ぢ乃間

ふ味方の兵士一人ぢも損ぜぢして二丸ぢ乗取〜ことひとくふ
木下ぢ智謀乃ぢ成所ぢ乃ことぢて大ふ悦ぢ色ぢ氣色ぢ
うるぢ美〜しぢ乃ぢ木下畏りあれ併君の御高運ふ依所
ふく更ふ其ぢ功ぢ〜ぢとやてのち木下謹で言上しける
敵本丸ぢ引入ぢく必死乃勢ぢ成ぢ攻破らんとぢし
ぢく味方ぢも多く討ぢ死ぢ〜ぢ乃上故山城入道どの〜ぢ
一跡全く討亡〜ぬるぢ成ぢ却ぢ意ふもぢ右
兵衛大夫どのぢ成ぢ籠城乃諸侍の命ぢ助あるぢく城
のぢ成ぢ請取ぢ成ぢ國民ぢ成ぢ殿乃ぢ仁恵ぢ靡ぢ成ぢ
あぢれ寛裕乃ぢ成ぢ沙汰ぢ成ぢて祝ぢ成ぢ成ぢと勧ぢ成ぢ成ぢ織田
殿ぢも同心ぢ成ぢ〜ぢ成ぢ山城入道のぢ成ぢふ義龍ぢ成ぢ討てとぢ成ぢて

をわりひけを龍興に正しく入道乃雛ふもしけるこそ餘
侍どもを元くわ渡りものぞし味方とおして上方退治せ
先手りくまくへ働りせるべくしちやく龍興出城乃ことと
ばたらくへやと仰いざされしらば木下大ふくこび逮りそ
乃ふ執行ゆべくとて二丸ふくうり味方の諸将ふそのよしを
告ちくせさく使者を仕立さく龍興の叔父ちうくろ長井隼
人の方へ中送りけるに今に是まぐふくいたやく出城ありて
何まへちくもれ心み任せらるべく右兵衛殿さへ左の如く
いちんや自餘乃人くふ於ていさくら別心ちくいと信長せん
深意城示しらば隼人もいふもして龍興乃命を助ばや
と祝ひし処ちくれぐ一義ふも及ば同心しそ上ふて

諸将の心ぐ祝しふ日根野兄弟牧村丸毛その外はぐくも
眼前ふあまくの妻子眷属童男童女ば命ば絶んことのうそ
ゆさふ必死と覺悟せし勇氣もくもくしと城をひ
らきくく退去さべくとくく義ふ一決し隼人より木下へ
乃由を返答しけるに木下そ乃旨を執達籠城乃男女助命相
違ちく相傳乃重宝金銀衣服ちくのまくるべくとの誓
書を立られしふよりて城中一同ふ安堵のおもひを取物も
そこくふ取調へ我先ふと遁を出るを寄手ハ二の丸より
麓まぐくの間を二行ふ備えくその中ば通しるくそ先の
日ふはまり百姓町人を出し次の日乃午の刻ふいたるまぐふ
大将よりして諸侍のまくば退散を屋しと定めて其の夜ち

嚴重ふ守り明〳〵ゐ

齋藤道三その主長井藤左衛門長弘を殺して稲葉山の城を奪ひ〳〵享祿三年より永祿七年ふゝうて三十五年ま

の間道三義龍龍興三代を経〳〵り

重修眞書太閤記二編巻十六終

重修眞書太閤記二編巻之十七

龍興稲葉山退城乃事

并織田武田と婚姻を取結ぶ事

齋藤兵衛大夫龍興織田信長乃軍兵二の丸まぐく逼入〳〵ふ恐怖如何ふせはと心神悩亂し前後不覺ふ取乱〳〵る所へ木下藤吉郎兼て竹中と約束せ〳〵と伝忘れぞ城中ゟ男女助命のことゞ申送〳〵ゐ龍興をはじめあまたの老弱蘇生りる心地して其の旨籠城乃もの共へ告知せ百姓町人ハ其日乃中ふ出城〳〵大将おゝび諸侍乃分永祿七年八月十五日ふ退去あるべき定ふく稲葉山乃本城ゟう麓の町口まぐく警固の兵を出

終夜守り居けるうちにて小さやぬ暁方の東天白みゆく比兼約の通り齋藤兵衛大夫龍興をはじめ其室家および次々の女房達城さきを立くその跡小齋藤九郎左衛門長井隼人同飛弾守日根野備中守同彌次右衛門牧村牛之助丸毛兵庫頭されら城宗徒の侍どもく何も妻子幼稚なる子供等城倶し住なるべし城を出たり〳〵路次城警固せし織田の軍兵小禮もとゝ通りける木下兼さよ了龍興乃ちゆ為方なし心のまゝに他國いさるべし自餘の人〳〵多年の住國なり残り止まるべしとて其をゆ〳〵中次〳〵して本領安堵相違あるべしとて送りけれども此等いとる齋藤厚恩のものなれば主乃浪々見捨がたくいかまも身城浮草の根處定め決出行なり丸毛兵庫頭と齋藤重恩と云ふあるべし其

一旦乃義ふかくて籠城せしまゝなれば累代相傳乃國を云織田殿より招なをのふ従ひて降参をり小笠原長氏乃四男丸毛六郎兼頼を土岐光定の壻として美濃國丸毛郷ふ住を子孫よりて氏と成末々の侍なるべし龍興よりも身の暇出されはまこれのが様く落行く由緒のまゝに在付を求めなり龍興主従なれ〻三十餘人三代相續して住なれ〻國をとゝなれ京都よりさらの好あるもとゝ打ひきまたそのなりを

長井隼人道利ハ道三入道の猶子ふて義龍の弟ふ准ぜれば龍興の叔父なるを共まことハ長井新九郎長弘の末子なりと云又一書ふハ齋藤豊後守利隆の三男ふく道三入道の弟ふ准ぜと

あゝ龍興の叔母一人と菊亭右大臣晴季公の簾中一人と筒井順慶
乃妻とゝもつくり
斯て稲葉山の城落しかゞ濃州一圓ゝ織田家ゝ属し國人平均ゝ出
仕して尾濃静謐しけるゝゞ織田殿年來の本意一時ゝ達しける
ことゝ悦びのひとゝれく功を校りて恩賞を施こされる中に
木下ハ先年より洲股ゝ在城して敵國を斥候ひ兵を費やさゞ
財を損さることとゝく濃州の諸侍を味方ゝ引付しのゝゝゞ
又嶮難乃虎穴ゝ探りて稲葉山の峯を極め兵粮小屋を燒一乃
丸と奪ひしことと全く木下一人の大功と云べし然らば今度の勲功
第一ゝして他ゝ比類有べゝゞとて濃州の内三郡ゝ賜はる是ま
での通り洲の股乃城主なるべしと仰出されるゝ

此三郡ゝ安八多藝石津ゝゝの内ゝ國人の本領あるゝゝ洲股
乃城入八萬餘石と知べしゝ木下廿九歳の時ゝゝ
扨又今度稲葉山を乗取しゝ時酒瓢箪の相圖ゝ以て安々と二
の丸へ人數ゝ引入しゝと即智ゝして且吉例ゝゝれゝゝの後其方乃
物印ゝ用ひゝゝゝゝと許されゝゝゝ木下面目身ゝ餘り重々
深き君恩難有奉存ゝ物印の義ハ許を蒙りとゝ後是を用
てゝ所領のゝゝハ過分のゝゝゝゝと云かりいまゝゝ當國も新りゝを
手ゝ入しまゝくゝみて山べ暫くゝゝ領の内ゝさゝ加えらゝ君恩
ゝゝ仁恵ゝゝ百姓原ゝ知らせゝ度と固辭しまりしとゝも織
田殿聞食許さゝゝゝゝゝ功ゝゝ賞しゝ勞ゝ報ひ罪ゝゝ糺しゝ過ゝゝ
戒しゝむれ治國の大道ゝゝ何とゝくゝの方乃辞ゝゝゝ其

まゝ辞せゝもぐさぞと宣ひるゝに木下も辞たる様得ぞ抜
のまゝに請申てゝ
酒瓢箪に逆瓢箪の語ふゝゝ依て木下の物印に逆瓢箪
を用ひゝまゝ
その時木下心の中ふゝの瓢箪様馬印と思勲功あるゝとゝ
一門ゝ小様増加えんとおもゝれるゝそゝとして後年に至り
数多くまゝしゝ木下の千ゝゝ瓢箪と稱美ゝ馬印ゝは
ゝゝふゝゝ
北条五代記に氏康の馬印を五色に段々の大幟ゝゝと見へく早
雲氏綱乃沙汰ゝゝれゝ氏康に比するゝや氏康の家督ゝ天
文十年に至て信長八歳木下六歳の時ゝゝ又三好孫太郎天文

十五年一番鑓して一挑燈様指物に出し二度三度四度五度ゝ
功を積ゝびに一門ゝ挑燈さし加え七挑燈まゝ付ゝゝとゝゝ
ゝれ木下の瓢箪を付増ゝゝゝ類ゝゝるべゝ
ゝゝ堀尾茂助ゝゝゝ木下の陣頭に逗留ゝけゝゝ稲葉山
落城の後暇を請ゝく舊里に帰らんとせゝゝ木下様々引止ゝ
かどゝゝ織田殿に仕えんとゝ父の遺命に背けゝ快ゝゝ但此
日比木下殿の懇志忘ゝ難くゝゝゝ伺候仕り相應の
忠義様ゝゝゝゝゝと言ふゝゝ木下その志様感ゝ我名の
一字様與へ吉晴と名乗せゝゝゝゝ茂助大に悦びゝゝゝけ
暮二心ゝく奉公怠ゝゝゝゝゝゝ後に従五位ゝて帯刀先
生と稱ゝ禄百五十石ゝゝ次弟に昇進遠江國ゝゝ松の城主

ふるされく十二万石を領し給けり
木下近江國長濱の城城領を〻比百五十石を領し給たりと
云へ天正二年より五年十月まで〻とゝゆ然らば茂助世二
歳より世五歳まゝくの間とゝらる天正五年秀吉播州より
移られ〻時姫路三千石の地を賜ふその後丹波黒江ふ
うりされく五百石を加え同十一年五月四十歳ふして若州
高濱乃地を賜ふり二万七千石を領し給ふ坂本ふ移りて
二万石とゝり同十三年七月近江佐和山の城ふ移り四万石
を領し同十八年の秋濱松ふ移りて十二万石とゝりしの四十
七歳の時ゝり
信長既ふ濃州を切従へゝひく稲葉山の地形を歎ゞられ

清洲をゝゝふ移さるべしとおもゝ和〻らば今まで齋藤の營造
し塀櫓を破却し隍溝を堀廣げ新城を築さのゝゝゝの
評定あり尾濃両國の大守の居城なまば容易ふ経營ふゝ
ゝゝども先年より木下ゝ仕法ふく一村一木の貢を積貯ふの
ゝし上ゝれゝゝゝ數千本ふ及べり加之いゝまゝ良材ふ
礼ゝ今度大事乃城普請ふ用ひらゝふ之し〻ゝで諸民を
勞さるゝとゝくその年乃中ふ成就しけまば織田殿さゝふ移徙
ありて岐阜と名付ゝひゝりし後ゝ織田殿の武威尾濃
乃間ふ輝きその勢破竹の如くなゝらばやく此機を緩ゝ
ゝ四海の動乱を切鎮め天下統一ゝへく思召〻ゝれゝも
隣國ふ剛敵あまゝば麁忽ふ大義を發し軍城境の外ふ出さゝ

に暇なく中にも甲斐の武田大膳大夫晴信入道信玄を無双なる老
将といひ今川義元とは親しき中なる氏真を助けて境を伺ふ
ことをやいかんと常にやすからず思ひの外信玄と不和になくは
中々上洛はおぼつかなかるべしと思はれしかバ甲斐と隣好を通じ入
魂せんバ然るべからず候とて使者を送り音信をなしけれども
信玄さる古将なれバ一度も返禮に及ばれず是によつて織田殿
いさゝか不満なりけるが今年美濃に亡ろく兵多く粮富けれバ
武田の将略おそるゝにたらず候いざや一戦を挑て我鋒先を知せ
ざらやと永禄八年の夏その催ありけるを木下頻りに諫けるは
は今濃州新に御手に入しといへども人心いまだ服従せず候の
今まさに齋藤の苛政に苦しみ疲れたる民なれバ是を用ふる時

いろう候信玄は累代の名家といひその諸侍のいづれも功を積
労を重ねたる智勇の者どもなれバ容易謀りがたく暴に
勝を取るも堅かるべし信濃堺に兵を用ひられてより年月を
経られ候にいまだその御志をとげられざる時に果さるべき詮なきに
事にかゝづらはせられなば大事の機發を失ひ給はんかの近頃口
惜存じ候なり信玄の御使の御報答なきことに君を試参ら
せんとのことなるべければこれを怒らせ給はゞ彼古入道の
去がたきと笑はるゝのみならんとも又残念なり兎にも角にも
も知らずと顔にて但好を厚くし給ふべからんやはべきと申に
ぐわ織田殿大に得心ありて此上信玄を欺く方便いかゞすべきやと
宣ふに木下承はり左は智謀かしこき信玄なれども

今は家門の姫君は君乃真の姫君と披露ありてそうろう信玄の愛子四郎勝頼の室家とはしるさんとゝ我仰遣さるゝ孔てはらんぬべし信玄おもれを悦び家中の老臣どもおもはゞく同心はゞ真實の縁者としては上洛はとゝもいさゝらは跡ゝ機遣ひろうべしとやけるふくめ織田殿同心もしはゝ濃州岩村の遠山修理亮頼景の女まとと十四才ありうるを養女とゝ

一嚴き冊さるひろめ

流布本苗木の遠山勘太郎秋定の妻は信長の妹ありてそは腹ゝ出生の女子十四才ありうるとあまどども勝頼の室家は岩村乃頼景の女ゝして頼景の妻は信長の姑ゝく頼景元亀三年病死セし後秋山伯耆守乃妻とありう信長の為ゝ殺はる苗

木乃遠山勘太郎とゝは左近基の嫡子ありう信長今年三十一歳長男信忠さゝゝゝ八歳ありう其の妹の子ゝ十四才ゝ女子あるゝ理ゝ依て信長の姑ゝゝゝ

頼景は織田殿の姑夫ありうさいその娘は従弟女ありうさて織田掃部助信正を甲州へ遣して婚姻のことゝ我一度も報答とゝ

せゝゝ様信長ゝ音信度々ありうどども我一度も報答とゝ

然るゝゝゝゝも憤る色ありうく年々同様ゝ使者ゝ差越今度美濃を切取ゝ武威さゝゝゝゝゝ付てかくの如くゝ越ゝと一定此信長天下ゝ望ゝゝけゝ上洛を急ぐゝと覺えゝうゝ

ゝ三好松永を討平げゝゝゝゝゝゝゝゝ信長

ゝらゝゝその故は彼は斯波の被官ありう當家と對揚ゝゝゝの

あらしし天下の後見いうそか成得べくや彼らの女を送るハ人質の心ゆえ能々信玄城つをとくおりゝとをきれうゝ人の左程ゆ云城否屋をこゆあらぬとく掃部助城ゆ出きれ望の如く吉日を撰びて結納輿入の式を定めらるを信玄よりくゆはじめく使者を立られうう

甲陽軍鑑ゆハ永禄八年九月九日織田掃部助四郎殿の縁女のことにく甲府へきゝうし由城記ゝその年十月十三日姫君高遠城へ輿入とあり此年信玄四十四歳勝頼十九歳

織田殿大ゆ悦びひゝひ同年の冬十一月姫君を甲府へ送り四郎勝頼の室家とゝされ武田織田の両家親ゝき中とゝう明る九年の冬姫君着帯のきゝえありゝるゞ同十年の

秋男子出主ゆはしゆを両家の悦び大方ゝ方ゝ別ゝて信玄ゆれを珎ゝゝうのひやゝて武王丸と稱ゝけゝる城武田總領の名ゝゝゝゝ

とゝく武田太郎と改らまゝうう

武田太郎信勝是ゝう流布本ゆ太郎信家とゝるハ誤ゝう

然るゆこの姫君産後の艱ゆくむ悲く成のゝひゝゝハ信長本意ゝゝるゝにゝゝゝゝ遂ゝのゝ親かゝうて薄くゝうゝゝゝ

ゝゝと憂ひゝう色を見ゝく木下ゝの時ゆのゝゝく武田の末の姫と織田殿の嫡男奇妙ハ曹子の方へ入糸ゝゝゝ由城ゝさゝゝと勸めしゝゝ信長ゝゝく掃部助城使ゆくゝのゝゝゝゝ入らゝゝゝゝゝ信玄異義ゝく同心ありしゝゝゝの年十二月結納ゝゝ使者甲府ゆ來り信玄ゝうハ秋山を使ゆく輿入の式城ゝさゝて

両家むすび縁者の因になりけり
甲陽軍鑑に十一月廿一日織田掃部助さしこす是は信玄の息女七才なりけるを信長の嫡子城介内方にと請うけしこと也
信玄同心ましましけるによりて十二月中旬祝言の樽肴をそへて甲府へ参る信長より信玄へは音信は虎皮三枚豹の皮五枚段子百巻金具鞍鐙十口は料人様へは厚板百端薄板百端緯白百端織紅梅百端代物千貫気らきもの帯上中下三百筋は樽肴作法の如しとなり奇妙は曹司は信忠なり今年十一歳

瀧川左近一益注進の事
并 信長勢州出馬の事

織田上総介信長の武威近隣に振ひたれども専ら上洛の計義を廻らしなりといへども此節京都に三好松永が輩とかく合戦を企て騒動止ざれば江州佐々木家内分の取合隙なくして路次ふさがり通りかたく且都の将軍おそろしきまさねば上洛せらるるとも四方の逆徒を征罸致しがたかるべしと思惟せられ自然と延引なしける処に先年より勢州の押として桑名に差置れし瀧川左近が許より使者を参らせけるは一益向方を以て蟹江桑名の両城を持固めてはべれども北伊勢の侍は関神戸楠那とつは其武勇に長じ智畧すぐれ抜群なるを以て一益これを侵し掠めんとしやまざりし処はいまだこの程君の御威光強く美濃國を切従へ給ふ由を傳へきゝて勢州乃侍どもも恐怖の心を生じ招かざるに桑名へ使を以てもちろん降参せんと申入れもがら

頗る多くありて世の勢ひ勢州へは出馬いたし貞弁三重鈴
鹿奄藝安濃郡までも攻取せんと袋の中の物をさぐり
掌の珠を数ふるごとく心安くはべりと言上あり信長大
に勇ましくせらるを左も有んとて即時に陣觸ありけるを木
下秀吉上して勢州に發向のこと瀧川に条々こまごまと透間なく
はべりしも此節少々に見合ふべきなれども故を甲州へは輿
入ありし姫君逝去ありて間もなくは忽干戈をかまへ
るべきなり信玄何とぞ思慮あるべきことなれ
ども織田殿時をば得ずして失ひやすし息女を愁
傷を忘ずしもふもつゆく馬を出して勢州を切静めんと
ありしかるに八月廿三日乃早天に尾濃の軍勢一万余騎を

卒して岐阜の城を發して勢州桑名へ打て出らる
流布本木下武田と縁邊の論齋藤北畠の論拙ふして云り
たくひ因ありて城削る蓋筆者の撓へなり
瀧川一益その由を聞て自身路次に出迎へ居城に入れまゐ饗
應なしたるその経營尋常なれば織田殿も瀧川に懇志を
悦喜はしたし直に打出て桑名近隣の敵地に放火なしの
味方乃威光を示さるべき北伊勢乃とりづら面々に居城を
守り防戦の用意怠なくば聞えしにより何の地より責べ
きやと評定ありけるに小野もり手近乃ならばまづ八
田の城を攻らるべしと十々
八田の城今は矢田に作る伊勢風土記に桑名郡矢田村八矢田

市郎左衛門が居所なりとあり

然ば打に立者どもさく三千余人を差向らるゝなれば小城也大勢向ふときらば忽ち落失るべし又防戦ふとも

そだ[illegible]ゆらあらんと侮り軽々若手の兵士のみ城遣べきれなきば一時攻ふ揉落さんと関を發し鉄炮を打かけ無二無三ふ責ゝるの城の南のうこい輔正成の後亂ふ揉七郎左衛門正具とく先祖ふ劣らぬ智謀武勇の名士と大将として固めらる正具常ふなく兵士を調練して手足の如く働らセ功ふそなる恐威城立ざる偏ふ判官正成の風韵ありとて皆人なびき従ふるどふ外見を柔弱なれども数年持ゝ堪し城なれども織田の大軍押よせ攻るとゝくども少しも驚ぐ色

を見せ防ぎふ五百の勢城以て防ぎゝゝくども日ば教導せし輩なれば正具が指揮ふ従ひ働きなれども寄手の大勢なりとゝくども血氣ふ逸り隊伍ゝのゝ疲短兵急ふ攻落さんと堀ふ飛入塀ふ取付ひき壊らんとせる処を正具よくゝ見濟して合圖の鉄炮城放ちやいなや三方の櫓より積蓄ゝる大木大石城雨の如くふ投掛ゝ塀ふとり付ゝとび鑓長刀ふて切落ゝ突落して防ぎなれば寄手討ゝるの二百余人手負るの数知れざる織田殿此由を聞食き手始の軍ふ多くの兵士城失ひゝるおそ遺恨なれその義なくば大軍を以て踏潰ゝ見懲ふせとやと宣ひ柴田權六池田勝三郎坂井右近

等五千餘騎ふく速ふ馳向ひ〳〵一揉ふ責落し〳〵楠ご首
城提來れと氣もとゝ〳〵りく下知〳〵りくべ三人ひこもり再
び八田の城ゝ押よせ三方ゝより暫時ふ責落さんとひし
めきけり
ゝ〳〵所謂楠七郎左衛門のちふ八田を去く大坂本
願寺願如上人ふ從ひ三番乃定專坊とゝ

重修真書太閤記二編巻之十七 終

重修真書太閤記二編巻之十八

楠七郎左衛門正具防戰乃事
并織田殿自身高岡城を攻る事

織田殿の先鋒衆八田城攻ゝりしかゝとも城の中ふは
楠七郎左衛門正具よく防戰ひしゝ寄手死亡の者多く
して急ふ落城ふ及ざさるゝ由追々注進あるゝよりゝ織
田殿ふゝゝび柴田池田坂井等五千余騎をさし向らるこ
乃時木下い信長の内意ふよりゝ留守中のゝゝどゝを取ゝ
付ゝ跡ゝゝり出陣セ〳〵故漸今日柴名へ到着〳〵先降衆の
敗潰と聞大ふ驚きナるゝい思慮ふき若者どゝもの軍

なる様をいかを左様のるすいける習ふ〳〵他國ふ打出てた
しめく乃合戦ふ麁忽の働ふて後々まぐくの煩ひ那き抑
當城乃主い名ふしをふ楠正具ふり容易く落しがくら
るべし某常ふ間者ゝ諸國へ出し諸士の剛臆智愚をきく
り聞しては正具ハ小身なれども名士ふり力攻ふ攻さセ
ふくく危きなりべしとやく責口の諸将衆ふは下知ありて
過ふくさ様ふは沙汰ひべしとけきべ織田殿きく召前よ
を我過ふく若殿原をきし向くしちべ寄手敗北をしかども
今度は柴田池田坂井ゝ向くきべ楠いろみくけしとをあさ
間ふゝ平城ふり勢はなげふ五百計ときく寄手ハ五
千余騎勢ふ不足をあくし忽責落し楠ゞ首ゝ持くふ

尾しと勢猛く詣ふ〳〵ゝ木下ひくいやく〳〵浅間那
る平城ふなげふ勢ふく楠ふり味方の大軍をちとを
恐れて防戦をるを尋常の者と一体ふ思食るべふや殊
ふ一騎當千の兵とすべし大軍を以く無理ふ責ふば勝利
を得ことをいとを味方多く損ひし但矢田を伊勢根本の
城ふく此城さく落しはなぐ自餘を聞怖ふ落去して當
國平均しはんとふくゝ運を天ふ任セひくあらき
は合戦為成ら抜べ〳〵きとを此城ひとり落して伊勢乃
弱ふをふくゝれを又勝て味方乃強とを言ゞを當國ゝ
切鎮めんと思召ゞ八田をおくらきて高岡神戸の
両城をいゞきをうとをは攻あるべきふ勧めをうし

かば丹羽五郎左衛門森三左衛門一同にまろ議誠り
然るべく良将と勝易ふ勝とナるのいたやく秀吉うす
きもの議ふ付セうひいべきふやとナセーふとり織
田殿も合點まく〳〵八田の寄手城めしくさんろり然
る小牧田池田坂井乃三将と五千余騎と三手ニ分八田の
城へ押寄るやいなや三方より一時ふ責かゝり揉こりんぐ
責ゆきどゝも城中少ーも屈セぢろり城静めくさゝむ
寄手城待掛ゝり寄手い五千余騎数百挺乃鉄炮をたゝ
もあゝを放打ちまくゝたけるわどふ城の矢狭間を開
きゝ〇〳〵り牧田これを見くさはかれと下知ーけるこ
でさやうとの侍どゝも馳集り塀ふ取付乗入んまる處を

前の如く矢倉より木石城投こうけ鉄炮城放ち最敷防戦
も楠ゞ兵いたりうあれとも騒ゝ急こうず時分城見合セ
防ぎゝきば寄手心ゝきけくとゝも怖えうひく諷とひ
く引ゝ楠鳴をゝゞ先ゝく音をセぢを怒りて責きべ手繁
く投うち矢石城惜まぢ働ゝるふとりさしをの鬼牧田セ
めあぐゝ拳を握り城を睨んぐ立ゝりゝり
東海道桑名城下の南ふ矢田町あり桑れゝり大福安
永城過きば町屋川ゝり板橋城渡セ百六十間ゆうま
乃川原をむゝ〳〵矢田河原といまの川上右ふ城山あ
りゝを楠ゞ城山ゝり
されども此由を注進セぢは後難いゝぐとく使番城走

らせく城強く防ぎ味うて多く損ぜし趣なれハ信長ハ
急既ハ先手を呼返さるべき由下知ありしのち明りけるう
らめ弥楠をまくらの悪きものふおろ〳〵めされ〳〵おどを
再度使者をさし遣さるるを早々引返し〳〵と下知せられ
るの柴田池田坂井等ハ寄手をぞハ多く手を負ぬ然とそ
塀の一重を破り得ぞハ日比乃軍功をもむ〳〵く成ぬべ
しとの城一ツ落し得ぞして生くふ〳〵び人ハ面ぬ合
きぐきや只一挙ハ乗入く死ぬやものどもと士卒城をげ
まし責うる処へ織田殿の使者きうて仰を傳えしこの
ば無念なぐ〳〵止ことを得ぞ軍勢をはとえく引〳〵
そくるのち矢田の押えふを福富平左衛門平手監物両

人ハ千余騎の軍兵差をく城らの東に備をとゝさせ織
田殿をされとの高岡の城を攻べしとて自身總軍勢を引
卒して押寄らる
高岡の城を河内郡高岡川乃南ありあり神戸と東西
ハ相連るの来名ちめまうりいくるまぐく今道六里
七丁あり
此城を神戸藏人具盛の一族ありるる山路弾正信盛千余人
ふく楯ちをうう
神戸藏人具盛を平資盛八代関左近将監泰盛の孫藏
人悦岩入道孫ありう實を北畠政具の末子といくり悦
岩入道乃妹を山路正幽乃妻ふく山路弾正同彌右衛

門川木九之丞の母なり
弾正盛信武勇人ふ勝れ軍配の功者なれど少しを退屈
乃色城見とゞ虎口くを持固めく城を待うりの又神
戸の城乃主蔵人具盛元よりかくまつき勇士といひ智謀
まつ深うけきば織田勢の軍ぶりを見たりと待搦へ
旗下の面々ふ觸ふがしやく神戸ふ聚りて籠城をし又
ゑ各々の城城よく持うこめ一左右次弟ふもを寄ち互り
そくひ援うべしと勇ちまくぞ下知しりめくふ処
ふ織田勢一万ちうめ高岡へおし寄見のふふ八田の城とは
乃昏り要害堅固ふして軍勢を一千余人ちうはきと
は一時責ふゑふ〜がさのふ屋し然とを味方ゑ大軍

ちう入昏く攻戦を終ふ八攻落ちぐさ城但柴田池田坂
井等は八田乃城城攻く手勢をふ川このまつ屋し森
三左衛門丹羽五郎左衛門り先鋒をかげアて二陣こ
續く屋きふりとく森と丹羽とり三千餘騎城さし
そくこく先陣ふまこはセりれば関を作りく寄ふとひ
としく鉄炮城打うけ息をを継セば責むふ城中ふ
こはそこ〜を怖きば虎口くふ待設けくる鉄炮石
弓城ちふち掛ちを専途と防ぎ戦ふ大将山路弾正
味方城いさめく下知しけるゑ八田の楠は小勢ふし
て然を平城乃浅々敷うはくふく信長乃大軍を二度
まぐく追崩し終こ城城丈夫り持固免しい多く得ご

たゝき侍りてそを〳〵當城を要害よく軍兵はゝ一倍り過くり楠ぶ和を大處城たゞ〳〵ぶさゝり五度を七度を花々敷軍して敵を追散さゞを武勇芸家ふ生れ〳〵詮ふ抜をふけを勤よや若りのどゝを炎城堪らや軍兵どゝを大音聲ふ呼ゝれゞ實を良将芸下ふ弱卒ふ〳〵必死とゝりく防ぎけふその上要害よけを〳〵ば寄手心ゞゝりハ猛くゝを進えかくゝさゞで見えゝ

アゝゝふ信長大り怒り總軍一度ふ責入やと宣ひゝる

を木下承ゝり此城乃体ゝらく〳〵急ふ攻落〳〵がゝく見へいかりを日を夕陽ふ傾むけり不知案内乃地りて夜軍は大〳〵りのゝを所ふひゝやく此勢を引上ら社

ゝく然ゝゞ〳〵とゝけをば信長怒り憤りめくどを城まゝゝ容易く落〳〵かゝきゝる諸人乃見る處等〳〵けをば止〳〵ゝ得ゞ責口を緩げ軍勢を引上ゝく来名へ帰陣ま〳〵ゝふ高岡ふゝを織田家乃軍勢一責七めゝくたゝはゝり引退〳〵と心得ゝ〳〵定めゝく夜りゝ入ゝく又責ら〳〵ゝふゝふとおりひゝるふ来名まで足長り引ゝえ〳〵ゝと其意城得ゞ敵乃謀をば悟ゝゝ祝どゝを味方を只用心堅固り守ゝゞ〳〵と弥防御乃手當厳重ふゝ〳〵ゝゝりゝの時楠正具は寄手引退ゝゝち信長乃大勢神戸高岡り發向ゝる由城聞高岡乃山路を去りのゝれゞを左右ゝく落城ゝく

きふをあらゝ祝ども信長去の國ゟ長陣を居なゞ臆
病未練乃國人等降参なしゝく先鋒ゟ加なるべしを
ゝゝば味方ゟ取ゝく大なる患なり兎ふを角ふも信
長城欺なやく飯國さしむべしと計策城定めて腹
心乃郎等城使者と形し神戸高岡の両城へ越け
るは信長取かゝみ攻ゆゝく隨分精力をはくして
防禦なしのゝふべし五六日の内ふ信長城歸國セし
むべき謀ありと最懇ゝ告示し就中高岡城外城
民屋竹木を寄るふ妨とゝり守るこ仕ゝりと形城
をのゝれども敵ゝり焼ゝ時を味方の弱ゝをゝ
を味方ゝり焼時を敵乃ゝゝり口城妨をゝをゝを

まゝと多しゝゝは敵城下乃火城ゝく疑ひ怪ゝ見合
ゝるゝちゝ一時二時をゝりふべしその疑ふ心ゝり
敵を不戦ゝを小心勞ゝけゝども味方を城中ふ
安座して鋭氣城乃しゝふ内ふを我計成就邪
ゝ形ゝをありとゝりしゝば山路を尤ゝ城しゝ謀計
ありべし勉めゝと返答なしゝゝを神戸をおゝく
心得ゝ懇志乃条浅ゝゝと心中乃機密城日を數
えゝく待べきゝり決定しいよゝく堅固ゝ城をゝり
嚴重ふ備へ城立ゝくゞ居ゝゝゝめ

山路彈正民屋竹木城焼事
并木下虚實城計城を攻事

織田殿は初度乃城責利なくしてむなしく来名へ引返しのひるゝゞ憤りふ堪ず一夜ゝ千夜と待暁し翌日卯の刻ふ来名城出馬ありて昨日乃如く八田乃城ゝ押へおき神戸の城へも兵ゝさし向はく高岡乃城へ押寄らるゝこの織田殿諸将ゝ下知せられゝるゝ味方も大軍なり城下乃竹木民屋を焼たらひ廣場ふなしく働らきべしとありしゝば兵士等走ちりく民家ふ火ゝ放さんとする所ふおりひをくゝぬ林乃中より黒烟天ゝ焦しく猛火ちりて吹出し是をいうゆとつふ不どもをく餘焔四方ゝ覆ひくゝり火勢熾盛ふ焼競ひける城見く寄手大ふ

驚ず此方くゝり火ゝかけんとをし機発ゝ敵ふいりしゝちくゝれしと見へくゝり味方乃謀をれくゝを拵の功ふしを聞くゝの城くゝく疑ひあやしみく進くかぬるを織田殿ゝ覧しいうゆを敵乃振舞あやしゝれを暫人数ゝまとりく見合まべしとありて扣おさしまセば木下ゝもセきゝりあれを山路ゞちりごとにく只城攻乃兵士ゝりくゝひゝ起させんとるるふひくば拵乃手便ふ乗し体ふく火乃鎮はぐ諸軍勢ゝ休息セし先鎮火乃後敵乃形氣ふくりてちくゝ旨ゝりくゞ或ありと言上セしゝば織田殿同心はしくゝ鎮火乃ゝ仕ちくゝび押詰一攻セ先ん

かゝあり し 秋木下進出先刻うり城乃体状窺ふう城
下を焼く寄手の仕寄の さくうもを失ふ さもせ、乃
火勢ふ肝状冷をて鋭氣を挫き城中ふくは是を見
く鋭氣状乃ひ敵寄ふば思まうう働べしを
待うけ し 処へ疑ひ怖けし人数を以く責ふ ふくを
その功あるくくを思ふれ ふその上時刻既う移り
ひくを今日は只対陣まぐにて引くませふ乃し
城ふく火鎮うふを敵定わく寄んけらんとわりひ
けふ処へ寄ずして城中の兵氣を緩しめんふる是
まく敵乃氣を挫く術ふくはうとナセば織田殿聞
食今日徒ふ引返さば敵まく今宵乃中ふ如何ある

方便状ふくを計らん ふ然ば只速ふ攻めるべき
ものと仰られくる状木下承るめは諚は尤ふは共
今くめは責めくるはくは定わて薄暮の合戦ふ及び
はべし夜陰乃城責は利ふくさのふはる殿のおう
せの処ふくはとナけをど織田殿もようく得心ま
ふは し 申の刻まぐ対陣けうて急ふ軍兵状引あ
ぐ早く 来名へ帰陣あり城方ふくは火鎮ふくふを
必定信長寄きくるあうんと諸士持場くを固先
く待くるうり信長衆備状立直し人数を入替ふぐし
くれば ふくや攻寄るあうんとわのふ処う駒乃頭
を引くしのくば城中案ふ相違して握拳て勇み

くふかを抜却さく草卧城増さくくの然るふその夜又
楠ゞの方くめ高岡へ使をさ〳〵越奇謀城示〳〵けふは
信長を猛火乃如き大将ふ〳〵く理不盡ふ攻やぶること
を好む氣質なめ今日無るのふ引返〳〵ては明日必
定我責ゆ〳〵せめらるゝ〳〵左あらハ危急乃ことを
もいひなんをそ乃時を斯くそうひの〳〵其内ふは
某ら秘計成就さくくきなめといさをそなまば山路悦
ぶ拔乃意ふ從ふべき由城答へさきく籠城の備へ
を固〳〵今やく〳〵と待ゐどふ明きば信長出馬乃
ゆく〳〵城の休城伺ひのふふ別ふ謀ありけふを見へ
さり〳〵ふを總軍一度ふ責うゆ只一時ふ乘入よや

とひし〳〵先ゞ〳〵ふ處へ木下馳きくゆ今日は追手
搦手總攻ふ〳〵く責のふ屋〳〵たゞ〳〵城乃四方一
方城明く責めさぐ要害乃ゆき処とあ〳〵ゐ処とお
の〳〵〳〵知るべし〳〵然のち要害ゆゐ処ふハ防ぐ兵
乃少なき城〳〵を拔〳〵よりめ攻入くゆ〳〵一揉ゆり揉
落さべ〳〵とやふぞ織田殿元よりめ好む勇戰あり速
ふ同心さ〳〵ゆ〳〵先鋒を柴田權六佐久間右衛門尉
二千余騎ふく大手へ向へを左乃方よりめ森三左衛
門坂井右近二千餘騎ふく押寄右の方くゆは丹羽
五郎左衛門池田勝三郎二千余騎ふく攻立る總軍
六千余騎の叫ささけぶ声天地ふ響きく〳〵木下

は遊軍とありて大将乃陣頭ふ備城立て扣へ居さ
り大将乃旗本ふは佐々前田梁田林等城右左ふ
松て四千余騎諸手乃働城見物してぞおそ〳〵ま
去程り三方の寄手関城ハたくり鉄炮を打りけ息を
を継セざ責め〳〵ほその勢烈火乃如く洪水乃よとく
そさ城〳〵さ言語ふ絶こり然どを城中覺悟乃上ふ
れを敵を三方ふ引受てそとしを驚怖乃色城ば
あ〳〵さ玉薬の續かんこさり打出し射出し
防ぎけるり寄手を多く疵を蒙りちと色めきて
見え〳〵処を三手乃大将一同り今日城乗取ば何
乃面目りあ〳〵と手須死人城引除踏越命を際と

責けるば城兵を今日城かぎりふ防ぎりり木下さ
ト兄より城の体を伺ひ居りるり右乃手をば城兵
多く集りて必死と防げどを左の手をば小勢り
くさのを大りふを思ざぬ様ちり然らば左乃手
を要害をこのを〳〵防ぐをのを少ちさちるへしこく
り責入て打落しはたやとけるば織田殿大と
悦ざれ佐々内蔵助前田孫四郎を先として一千余
騎ちり〳〵ふ責めふこれふ力城合ぐ〳〵を
柴田佐久間丹羽池田乃手へを下知あり〳〵かどいづ
を必死とありて攻こりりり城中ふて八山路
弾正八方城走廻り士卒をたげまし防ぎけるば左

乃手勢只今寄手乃急り攻るを見くくは要害よけをば危ふこうゝとをわるくどを攻る手稠く見ゆるこうゝ人數を増く防ぐやわりひ右の方の人數少々引分く左乃手へ加ふる筏木下急度見くを
は只今この城をゞ乗取ばさゞを續けやくくと大音揚く真先ふ進めばその手の勢一千余騎鉄炮きび
しく打かけく〳〵採立れゞ丹羽池田を日比急このぬ
木下ゞかくゞゞうわ責立るをくゝうみ見留し
るのあるやらん秀吉一人ふ手ゞくさをあたゝや乗
入やをの共と呼たゝり立ゞを寄手の兵士勇らゝち
火水乃中をうくをを一番乗我劣らゞと排ゞふ

城中乃防禦透間をうきと寄手乃勢ひ強くして遂
ふ矢倉一円責落しうわあたゝや此手うめ出乃城落
されんぜとをる所ふ山路弾正走りきゝり楠ゞ示せ
し危急乃ゝとは只今ゝるゞいゞく寄手筏誘
て見ゞやとく大手乃櫓ゝ兵士を出し大音ゝ寄
手乃ゝくゝすべきゝゝ責口少しゆるめゝく〳〵と呼せ
しかばきくい降参の開城うと柴田勝家於乃故城
問せけるゝ山路弾正降参仕るべきふくい間その趣
ゝはきくゝうのをゝいくとゝ柴田佐久間於乃由を
言上をしほどゝ織田殿をゝち暫時攻口を引
いくと下知せゝゝ木下聞ぬゝりしくをや乗入

よと厳重く攻寄けるを織田殿軍使共くらせく
是城とそ免のくら木下も詮方なく軍士をまさめ
く戦城とそむそ乃時矢倉より中様今日まらく弓矢
城とめく防戦いさしいるは弓馬乃家ふ生れし
義を守る所ふくい寂たや運ひ或力くはりいくだ
討死仕くきあれとそ一命を助け下さるこれとそ関
神戸乃そのどもを勧めく降参いさせやべし
去社者どもは味方ふ参るふ於くは北伊勢へ全く
は手ふ入りくしは免はとく今宵乃中り調畧仕ふ
屋くはそしは得心なきふ於くは是非ふ及ばず城
中乃輩切く出戸を陣頭ふ暴さるくはやう

ければ柴田佐久間織田殿へ言上し山路ゲヤとあるの
相違なきり於くは味方乃吉るの那めは賢慮い
ずれそうそひまれば織田殿りも当城をば只今
乗取屋乃をども関神戸鹿伏兎以下乃城くふ
味方共損亡せしめんとも不便なるべしまり諸将
乃評定共きく屋しとく柴田佐久間森坂井丹羽池
田乃大将等を本陣へ召よばをくの
高岡より来名まぐ六里乃ところ共毎日出張され
しる当時乃軍者乃法りあそば一説り日永の
四足八鳥山観音寺ふ信長本陣を居られく高岡を
攻られしとふ是なれふ近し